

□特集 Special

アメリカ先住民研究

〈公開講演会〉

Native Americans and Media History

講演者：Curtis Marez（南カリフォルニア大学）

司会：阿部珠理（立教大学）

日時：2006年6月17日（土）15:00-16:30

会場：立教大学池袋キャンパス 11号館 A204 教室

〈公開講演会〉

American Indian Leadership in History to the Present

講演者：Donald L. Fixico（アリゾナ州立大学）

司会：阿部珠理（立教大学）

日時：2006年11月22日（水）18:30-20:00

会場：立教大学池袋キャンパス 8号館 8101 教室

〈研究者セミナー〉

Native Reality and Ethos in American Indian History

講演者：Donald L. Fixico（アリゾナ州立大学）

司会：阿部珠理（立教大学）

日時：2006年11月23日（祝・木）10:30-12:00

会場：立教大学池袋キャンパス 11号館 A204 教室

〈研究者セミナー〉

American Indian Gaming: Myth and Reality

講演者：Donald L. Fixico（アリゾナ州立大学）

司会：阿部珠理（立教大学）

日時：2006年11月23日（祝・木）13:30-15:00

会場：立教大学池袋キャンパス 11号館 A204 教室

〈シンポジウム〉

南北アメリカ先住民の世界

講演者：阿部珠理（立教大学）

実松克義（立教大学）

司会：小林憲二（立教大学）

共催：立教大学ラテンアメリカ研究所

日時：2007年1月13日（土）17:00-19:30

会場：立教大学池袋キャンパス 8号館 8304 教室

立教大学アメリカ研究所は本年度、アメリカ先住民研究をテーマとし、講演会、セミナー、シンポジウムを開催した。また米国から6月に Curtis Marez 氏（南カリフォルニア大学）、11月に Donald L. Fixico 氏（アリゾナ州立大学）を迎えるなど、アメリカ先住民を研究対象とする研究者間の交流にも力を注いだ。ここでは本年度に開催したイベントの講演内容について、簡単に振り返ることとする。

6月17日に行われた講演会において Marez 氏は、アメリカ先住民がこれまで受けてきた差別と搾取の歴史を「インディアン奴隷制 (Indian Slavery)」という言葉で表現し、その「制度」がコロンプスの上陸以来、現在まで綿々と続いてきていることを主張した。その後では、マスメディアが重要な役割を果たしており、19世紀から20世紀にかけては写真がアメリカ先住民を被写体として撮ることで、大衆が彼らを「所有」することを促し、従属関係を再構築したと指摘した。さらに20世紀に登場した初期の映画において開拓時の帝国主義や先住民支配を繰り返すかのように、先住民の捕囚や戦闘などが描かれている背景には、エキストラとして動物以下の扱いで労働をさせられた先住民の搾取があったことも明らかにした。また Marez 氏はインターネットについても触れ、ネットへの接続環境の有無が経済的・社会的成功を導く要因になるのならば、多くの先住民がその環境を有していない現状は、格差拡大の原因となり、昔からの従属関係の再生産に一役買うだろうとマニユエル・カステルの議論に基づいて読み解いた。さらにSF映画が描くエイリアン像をもとに、人間にとってのエイリアンは、インディアンにとってのヨーロッパ人だという比喻をもちいた。例えば1997年の映画『コンタクト』では、エイリアンと遭遇する白人女性にインディアン性を付与し、彼らの経験を借用し、占有することで、象徴的にインディアン性を再植民化していると議論を展開した。そのようにして現代のメディアにおいても先住民は「奪われる」立場であるが、Marez 氏は最後にインディアンは未来を、そしてアメリカ大陸を取り戻すだろうというレスリー・マルモン・シルコウの主張を引用し、先住民の未来に対する希望を提示した。

11月22日には Donald L. Fixico 氏が150名の聴衆を前にインディアン・リーダーシップに関する講演を行った。その講演の冒頭を、Fixico 氏のご尊父のエピソードから始められたことは印象的であった。その語り口は、“story telling”という伝統が意識・無意識のうちに健在であることをうかがわせた。インディアン・リーダーシップは、主流文化との歴史的かかわりの中で相互に影響し合い、しかし独自の特徴を持つ。たとえば「リーダーは常にコミュニティへの貢献を意図し、またコミュニティから支持される人物であること」（コミュニティの重要性）や「宇宙や自然界における一要素である人間としての視点から、あらゆる関係性を考慮して決断すること」（生命の輪という世界観）などである。また、リーダーの資質として「美を愛でる心」を挙げ、「愛でた美しいものから返されるエネルギー」が疲労したリーダーを活性化させるとの締めくくりに、形而上的概念（超

自然の要素やビジョンなど)を日常の活動と密接にとらえる北米先住民文化の哲学がリーダーシップのあり方にも現れていることを実感した。

その翌日には午前と午後 Fixico 氏が研究者向けのセミナーを行った。午前に行われたセミナー 1 でははじめに、循環・コミュニティ・バランス・超自然的な存在をキーワードに、直進的な近代の思考とは異なる、全体性と関係性を重んじるインディアンの思想が紹介された。続いて歴史認識や社会的平等などについてインディアン側の視点から問題提起や考察が行われた。歴史認識の問題では、インディアンが伝承してきた歴史と学校教育における歴史との矛盾が指摘され、それを抱えるインディアンの苦悩について自身の葛藤も含めた貴重な意見が述べられた。さらに、インディアンの世界観から導き出される社会的平等 (democracy) についての考察がなされ、近年のインディアン自身による知的活動や学問分野での発展が概説された。質疑応答では、Wannabe などに関する会場からの質問に対して、汎インディアン意識や部族意識など重層的なインディアンのアイデンティティの実状について述べ、「インディアンであること」に対する自身の柔軟な考え方を提示した。

午後から行われたセミナー 2 は、インディアン・カジノとも呼ばれるインディアン居留地内で行われるギャンブル事業に関する内容となった。Fixico 氏は、事業の中心であるインディアン・ピングゴの成り立ちから、80 年代、90 年代を通じた著しい施設数の増加や近代的なリゾートへの発展の例を挙げ、さらに 1998 年にオクラホマ州に 37 ヶ所存在したインディアン・ピングゴ同士の競争の例など様々な事例について報告し、それらの事業を可能とするインディアンの主権について講義した。インディアンのギャンブル事業は、部族の自立を促し、再生の契機となる一方で、経営の失敗や組織犯罪の誘引など多くの問題も存在するため、単純にそれをプラス面だけで捉えることの難しさを感じられた。また、セミナー後の質疑応答では、インディアン・ピングゴに限らず、部族文化の復興、都市インディアンやインディアンの経済自立などに関して活発に、幅広く質問がなされた。

2007 年 1 月 13 日には、本学ラテンアメリカ研究所と共催で「南北アメリカ先住民族の世界」と題した北米と中南米それぞれの先住民研究者が講演を行うシンポジウムを開催した。

まずはじめにアメリカ研究所所員である阿部珠理教授がラコタ・スー族の信仰を中心に北米先住民族の精神世界について講演を行った。冒頭でスー族の世界観について創世神話から紹介し、すべての存在に分け与えられたメディスンという概念 (エネルギー) を論じた。そしてメディスンマンが執り行うスウェット・ロッジやサンダンス、パウワウなど、かつて法的に禁止されていた儀式が復活していることに注目し、その原因として、儀式がアメリカ先住民の民族自決運動の根拠の中心となっていたことを挙げた。だがその復興の助けとなったのが、「滅

び行く民の記録」を残そうとした文化人類学者たちの記録であったことは皮肉である。そして非血縁者も招き入れるティオシパエという拡大家族の社会システムや、ギブ・アウエイに見られる無駄のない循環の思想などの「繋がり」「循環」「調和」といった先住民思想は、「野蛮な」とか「未開の」というイメージで捉えられやすい先住民社会が、実は非常に文明の進んだ社会であることを示しているのではないかと検討を加えた。

次に本学ラテンアメリカ研究所所長の実松克義教授が南米の中央アンデス地域に住む先住民族のシャーマニズムとその世界観について視覚資料を効果的に用いて講演を行った。実松氏はティワナコ、チャラサニ、コパカバーナといったシャーマンの住む地域を確認した後に、クランデーロ（治療師）、ブルホ（厄払い師）、アグリкулトゥール（薬草栽培師）、ミスティコ（占い師）というシャーマンの種類について紹介した。またアンデスの神々などの超自然的存在について系譜学的にまとめ、神々への供物とされるメサは、同時に自然に対するの捧げ物であり、そこには非常にエコロジカルな発想が根付いていることを指摘した。さらにアンデスの十字架というシンボルは農業暦として使われているだけでなく、過去・現在・未来・永遠という4つのパチャ（世界）や生命サイクルを表すなど思想的シンボルとしても機能していることを明らかにし、パチャこそがアンデス思想において最も重要な概念だと論じた。最後にアンデス・シャーマニズムの世界観を静的・動的な宇宙観から解説し、それらを貫いているのは二元論であると論じた。二氏の講演後は、質疑応答が行われ、フィールドワークをする際の研究者の姿勢などについて意見が交わされた。

今回の講演をもとに3名の講師の方々から本誌に寄稿していただいた文章を以下に掲載する。

（文責：奥村理央・小林加奈子・渡村麻衣子・河内卓）